

キアスム、非連続の連続——西田哲学と後期メルロ＝ポンティ存在論の接するところ（要旨）

加國尚志（立命館大学）

西田哲学と現象学は、表面的なすれ違いにもかかわらず、根本的な問題設定において、重要な共通点を持つように思われる。多くの論点を比較することが可能であろうが、西田哲学とフッサール現象学の接点をなすものがあるとしたら、西田における「永遠の今」とフッサールにおける「生き生きとした現在」の問題であろう。

「永遠の今」が個物の自覚的自己限定の、そして弁証法的一般者あるいは絶対無の自己限定の場であるように、フッサールにおいても「生き生きとした現在」「立ち止まりつつ流れる今」は、個体化の極限であると同時に他者との共同化、共存、あるいはすべてのモノダの包括者としての「大地」「コスモス」の開放性と同時性である。

個体と個体、個体と普遍の間にある矛盾対立するものの同時的共存という問題構成において、ライプニッツのモノドロロジーにおける「共可能性」「最大の連続」という、個としての「一」が普遍の全体としての「一」と連続することを、ライプニッツの予定調和とは別の形而上学的原理から明らかにすることが、西田と後期フッサールの共通の課題となっている。

西田は、個物と一般者の限定的関係を、とりわけその媒介機能において「非連続の連続」という概念を用いて語ったが、「絶対矛盾的自己同一」も「逆対応」も、「永遠の今」における「非連続の連続」から考えることができよう。フッサールには絶対否定という媒介の思想は見られなくても、この「生き生きとした現在」において「根源現前」と「脱現前化」が同時に作動し、この「二重作動」（谷徹）、あるいは二つの反対方向への分岐とその同時性は、「前論理的」な逆説、パラドクスであり、矛盾対立するものの共存、共存不可能なものの共存である。

西田幾多郎における「非連続の連続」の概念は、個物の同一性、個物相互の関係、個物と普遍の関係において、矛盾する対立項を一つの同一性（あるいは同時性）における共存として理解することを可能にする。この、一と多、同一性（同）と差異（他）についての言明において、矛盾したものの同一性を「非連続の連続」「即」という媒介を通じて示すという点で、それは西田独自の「弁証法」が下図となっている。フッサールの「生き生きとした現在」のうちにも、現前と脱現前化、現前と不在の矛盾を認めつつ、そのままその場でそれらを調停する一種の弁証法が潜在的に内在している。フッサールは弁証法という語を使うことはなかったが、フィンクやメルロ＝ポンティにおいて現象学に内在する「弁証法」の問題は表面化してくるのである。

後期メルロ＝ポンティの「野生の存在」の存在論は、存在と無を単純に対立的にとらえる肯定主義と否定主義を退け、「超弁証法」について語りながら、その対立よりも根源的な「存在」「～がある」(il ya)をとらえることを主張する。彼が遺した講義録では、弁証法の概念をプラトンに遡らせながら、「同一性は差異の差異である」とするテーゼを取り出してくる。メルロ＝ポンティが見出す弁証法は、同一性と差異、内在と超越が相互に包みあう関係にある。メルロ＝ポンティは、この関係をキアスム、可逆性というヴァレリーの考え方に見出している。ヴァレリーのキアスムの定義は、私と汝のまなざしの交換であり、「一人であることも二人であることも困難」な状態であり、私と汝とは決して合一することはないが、ただ対立としてもとらえられない。おそらくこれは絶対矛盾的自己同一ではなく、切迫しながらも実現しない同一性であり、しかしまた矛盾する二項が単純な否定によって分離されているのではない関係である。メルロ＝ポンティの語った「キアスム」や「可逆性」を、矛盾が解消されることも放置されることもない、弁証法に代わる論理ととらえるなら、そこに西田の「非連続の連続」と接する点を見出すことができるように思われる。

最終的に、このような接点の両岸で、西田哲学とメルロ＝ポンティの存在論の間には、「絶対無」と「野生の存在」の間の対立が残ってしまう。しかし、この対立は決定的なものなのだろうか。絶対無の場所がまた歴史的形作用の場所でもありうるのは、解決不可能な矛盾としての身体が生と死の課題を我々につきつけるからではないのか。「非連続の連続」と「キアスム」は、ただ一つの身体を生き、死ぬことの矛盾と課題を受け入れることそのものの論理ではないのか。本提言では、このような観点から両者の哲学を考察する可能性を提示したい。